

花の街

男爵家に生まれた團伊玖磨は、クラシックのみならず映画音楽に至るまで幅広く活躍した作曲家。江間章子は、昭和の日本を代表する作詞家。この曲は 1949(昭和 24)年に初演され、戦後日本の明るい希望の象徴として歌い継がれた。

《わがうた》

作詞の北山冬一郎は、戦後に活動していたが詳細及び消息不明の謎めいた詩人。團のもとにふらっと姿を見せて詩集を置いて、また居なくなったという逸話もある。詩集『祝婚歌』は終戦直後に出た北山の出世作で、この詩集から採られた 5 つの詩に團伊玖磨が 1947 年に作曲。リートのように気品漂う歌曲集である。

《マチネ・ポエティックによる四つの歌曲》

「マチネ・ポエティック」とは、日本語による押韻定型詩の試みで、太平洋戦争中に始まったが、外部に公表されたのは戦後だった。この文学運動の担い手は福永武彦、加藤周一、原條あき子、中村真一郎といった詩人・作家で、本歌曲集は 1950 年に中田喜直が彼らの詩に作曲した。なかでも加藤周一の「さくら横ちょう」は単独でも演奏機会の多い人気曲となっている。

霧と話した

中田喜直が、ノンフィクション作家でもある作詞の鎌田忠良とタッグを組んで作曲した、切ない大人の恋の歌。初演は 1960(昭和 35)年。先の見えない濃い霧の中にいるような不安げなピアノ前奏で始まり、繊細な恋の痛みが謎かけのように綴られる。

《パリ旅情》

全 8 曲からなる歌曲集で、発表は 1963 年。50 歳を迎えて円熟期にさしかかった高田三郎が、深尾須磨子の詩文集『パリ横町』から採られた詩に作曲した。深尾は与謝野晶子に師事した明治生まれの作家・詩人で、度々フランスに渡っており、実際に自分の目で見て感じたパリの風景が映し出されている。歌曲集は明るい歌と暗い歌が交互に組み合わせられ、心情の明暗に寄り添うようなピアノ伴奏が沁みる。

くちなし(《ひとりの対話》より)

《ひとりの対話》は、1971 年に完成した全 6 曲からなる歌曲集。作詞・高野喜久雄と作曲・高田三郎のコンビは、数多くの合唱曲を生み出したが、内省的な歌詞によるこの曲集はあえて歌曲(独唱曲)として書かれた。曲集の最後を飾る「くちなし」は、単独での演奏機会も多い。くちなしの実に亡父の面影を慕う名曲である。